

## 19 日英語における非構成素等位接続文の派生について\*

英語には一見、非構成素が等位接続された文が存在する (Dowty 1996 参照)。

(1) Mary gave [John a book on Monday] and [Bill a pencil on Tuesday].

(1) では間接/直接目的語と前置詞句がそれぞれ等位接続されているように見える。このような表現を**非構成素等位接続 (Non-Constituent Coordination (NCC))**と呼ぶ(古くから Categorial grammarにおいて扱われてきた現象であるが、紙面の都合上それらには触れない)。等位接続は構成素のみに適用されることが広く知られている。そのため(1)は一般的に、(2)のように主語と動詞以外の要素が、句/節から抜き出されてその外へと移動し、それによって残ったMaryとgaveに残余句削除が適用されて派生すると考えられている (Sailor and Thoms 2014など参照)。(その他の分析は、Bruening (2015) など参照。)

(2) [Mary gave John a book on Mon] and [Bill; a pencil; on Tue<sub>k</sub> [M gave ~~John a book~~]].

NCCは日本語にも存在する (Koizumi 2000)。(3)は、構成素ではない主語、間接/直接目的語、数量詞がかたまりを成して、接続されているように見える。

(3) [マリーがビルに本を2冊]と[アンがジョンにペンを3本]あげた。

本稿ではまず Koizumi (2000) の**動詞移動分析 (Verb-raising Analysis)**と、Fukui and Sakai (2003) の**非移動分析 (In-situ Analysis)**を比較する。次に Kobayashi (2015) を紹介し、非移動分析の方がより優れていると主張する。

Koizumi (2000) も Fukui and Sakai (2003) も、NCCの基底には、より大きな構造が存在すると仮定している(基底により大きな構造を想定しない分析については、Takano (2002) を参照)。例えば(3)は、(4)のような構造から派生されると考えられている。(4)では動詞句(もしくは時制節)が等位接続されている。

(4) [マリーがビルに本を2冊あげ] & [アンがジョンにペンを3本あげ] た。

動詞移動分析では、基底の構造において、動詞が動詞句よりも高い位置にある時制節の主辞(時制辞である T)へ移動し、動詞が抜けた残余動詞句が等位接続されると考えられている。これを図に示すと(5)のようになる。

(5) [マリーがビルに本を2冊<sub>t</sub>]と[アンがジョンにペンを3本<sub>t</sub>] [あげ+た]。



英語やフランス語などは、主辞先行型語順の言語である。(助)動詞に主辞移動(head movement)が適用されれば、結果として語順に顕在的な変化が観察されることになる。しかし、日本語は主辞後行型語順の言語であり、もともと動詞と時制辞が隣接している。そのため主辞移動が起きたとしても、結果として語順に変

化は現れない。つまり、表層的なデータの観察からでは、主辞移動が起きているのかどうかを判断することはできないのである。

Fukui and Sakaiは移動分析に対して、動詞の主辞移動を想定しない非移動分析を提案した。非移動分析では、動詞が音韻的に削除される（いわゆる**空所化(Gapping)**）と想定されている。Fukui and Sakai (2003) は、「構成素に見えない要素」は、動詞が音韻的に削除された結果として形成されると主張し、さらにそれらが音韻部門（Phonological Component）における「再分析操作」により名詞的要素になり、接続詞「と」で接続可能になるのだと主張している。具体的には、(6) のように動詞の空所化が起こり、その後音韻部門において、等位項が名詞的要素としてPF再分析され、NCCが派生することになる。

- (6) [マリーがジョンに本を2冊あげ] & [アンがビルにパンを3本あげ] た。

PF再分析：[名詞的要素 マリーがビルに本を2冊あげ] と

[名詞的要素 アンがジョンにパンを3本] あげた。

NCCの分析には、大きく移動分析と非移動分析の2つが存在することを見た。どちらがより優れているかについては、未だ議論に決着がついていない。ここではKobayashi (2015) の主張を簡単に紹介する。移動分析は、主辞と数量詞の間のスコープ関係について、誤った予測をするという観察がある。

- (7) [院生が誰かスクイプを1つ] と [教授が論文を1本] 載せなかった。

第一等位項内の「誰か」は、肯定極性表現と呼ばれ、否定辞よりも構造的に高い位置で解釈される (Hasegawa 1991)。もし動詞+否定辞が(5)のように時制節の主辞Tへ移動すれば、等位項内の「誰か」は否定辞よりも構造的に低くなる。そのため、「誰か」は等位項を抜け、否定辞よりも高い位置で解釈されるために移動すると予測される。しかし、これは等位構造制約 (Ross 1967) に違反するため、(7) が文法的である事実を説明できない。一方、非移動分析では、動詞+否定辞は移動しないため、第一等位項内で「誰か」が否定辞より高い位置で解釈される（載せなかった院生が、誰かいる）ことを正しく予測する。このことから、Kobayashiは非移動分析の方が優れていると述べている。

上述の議論のみで、移動分析を破棄することはできない。NCCが英語では移動と残余句削除により派生し、日本語では移動が関与せずに派生するとすれば、その言語間差異はどこから生じるのかという問い合わせが生まれる。紙面の都合上、この問い合わせについて考察することはできないが、今後の課題としたい。

\*本研究はJSPS科研費JP19K13228の助成を受けている。

(小林 亮一朗)